

——じゃあ今の記録はいつまで持っていていられると考えるてますか。

牧原 やなこと聞くなあ。市販車ベースやったら3151316km/hが限界やろな、いくら足回りやるゆうでも市販車ベースやったら限界ゆうもんがあるし、そやけどただエンジンだけやってもダメや、足回りや空力はもちろんやけど、結局アクセル踏むんはテストドライバーやろ。これからはエンジン、足回り、ボディ、プラスチックの気持ちを考えて、心理的なセッティングも必要になってくる。その事考えたらエンジンのパワーを上げる方がよっぽど簡単や。ドライバーも人間や、恐怖感のある車で踏まんのは当たり前や思う。失礼かもしれませんが、記録を出した時に、ダークホース的に書かれた記事がありましたよね、あれを見てどのように思われましたか。

牧原 ……見とつたれ……ゆう気になったな。やっぱ東京と大阪ゆうたら違くて、大阪は商人の街ゆうけど、逆や思う。東京は何でも商売に結びつけるのがうまい、ショップを見てもそう思うわ、雑誌の広告ひとつ見ても商売上手なんは東京や。オレなんかそういうカケヒキみたいなんが全く下手やから、それでダークホースになったんやろ。大阪は義理と人情の街や思う、これはホンマにそう思う、大阪の方が正直な人間が多いんちゃうか。

牧原は東京と大阪という間に大きなギャップがあることをしきりに強調する。なぜ最高速を狙ったか、ということに対して、東京には負けたくない、東京だけには



絶対に負けたくなかったとしきりに語った。また、彼の話には男という言葉が実に多く入っていた。男なら、あるいは男だからといった具合に、男性が物心ついてから常に自分を自分と戦わせるような、バンカラチックな感情を男という言葉でヒシヒシと伝えてくる。何となく、東京の下町の人情と似ているような感じがフツとしてきた。昔はダートラのレースでもクソ根性だけで勝てたけど、今は車を完全に仕上げないと勝てない、とちよつと淋しそうに話してくれた。

——牧原さんは最終的にはどんな夢を持っているんでしょうか。

牧原 夢ゆうか……ウーン、何というか最終的に真白くならない、燃え尽きて燃え尽きてあしたのジョーミたいに真白くなれたらいいな思います。車ゆうワクの中で幸せになれたらいい。でも今は目の前の事を一つ一つ片付けることで精一杯や。今ブームになってるチューンドカーゆうのは僕らの年代からスタートしたんやないかと思う。戦後10年ぐらい経って生まれて、ほつとかれた世代やから自由奔放にやってきた。でも僕らの世代はみんながんばってるし、オレも負けんようにせなあかんと思うてる。北の湖が引退した時も同じ世代

やからくやしかった。歌い手さんでもどうしても同世代の人を応援しようなるし、オレらの年代は連帯感が強いと思う。

——それは最後に、これからの動きみたいなのを聞かせて下さい。

牧原 今トリアル・レーシングという名でJAFの加盟クラブがあるんやけど、結構速いドライバーもいるし、7、8年もせんうちにF2に参戦したいと思うてる。それと、チューナーゆうたらカッコええけど、これからはただの技術者ではアカンわ、ただターボ付けて速い車作れるだけやたらいっばい出てきよる思うし、そんな中で生きていこう思うたら少しは営業的なセンスも必要になってくると思う。さっきもいうたけど、大阪人にとってはちよつと難しいことかもわからんけど、これからはもう職人気質の時代やない。

彼はこういふとすぐに、下の工場にある何台かの車に乗ってみてくれと僕にいった。いつも思うのだが、何の世界にしろ、トップに立った人というのは何か、言葉では表わせないエネルギーみたいなものを全身から発散させている。先に席を立った彼の後ろ姿に、それを再確認する思いだった。

